

日本工業標準調査会標準部会(第39回)議事録

- 1 日 時:平成19年3月2日(金)14:00 – 16:15
- 2 場 所:経済産業省526共用会議室 別館5階
- 3 出席者:二瓶部会長、飯塚委員、岩井委員(代理:林)、大山委員、小野委員、佐野委員、塩沢委員、田中委員(代理:嶋村)、富田委員、樋口委員、吹譯委員、前原委員、宮入委員、宮沢委員、矢萩委員、若井委員
(事務局):松本大臣官房審議官、福田標準企画室長、江口産業基盤標準化推進室長、相澤環境生活標準化推進室長、長野基準認証国際室長、永井基準認証広報室長、江藤認証課長、越海製品認証業務室長、田所企画官等
- 4 議 題:
 - 4.1 前回標準部会(書面審議)の結果報告について【報告】
 - 4.2 「国際標準化戦略目標」を踏まえた国際標準化活動基盤強化アクションプランの見直しについて【報告】
 - 4.3 平成18年度工業標準化状況報告及び平成19年度工業標準化業務計画案の概要について【審議】
 - 4.4 平成18年度工業標準化審議計画(追加)について【審議】
 - 4.5 平成19年度標準化のための調査研究テーマ案(新規)について【審議】
 - 4.6 基準認証を巡る最近の動向について【報告】
 - －国際的な動向について
 - －適合性評価の動向について
 - 4.7 その他

《配布資料》

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 資料1 | 日本工業標準調査会標準部会委員名簿 |
| 資料2 | 日本工業標準調査会第38回標準部会(書面審議)の報告 |
| 資料3 | 国際標準化活動基盤強化アクションプランの見直しについて |
| 資料4-1 | 平成18年度業務報告及び平成19年度業務計画の概要(産業基盤分野) |
| 資料4-2 | 平成18年度業務報告及び平成19年度業務計画の概要(環境生活分野) |
| 資料4-3 | 平成18年度業務報告及び平成19年度業務計画の概要(情報電子分野) |
| 資料4-4 | 平成18年度業務報告及び平成19年度業務計画の概要(MSS分) |

- 野)
- 資料5 日本工業規格の制定等に係る調査審議の専門委員会への付託について
- 資料6-1 平成19年度標準化のための調査研究テーマ案(新規)について
- 資料6-2 平成19年度標準化関係予算概要(参考)
- 資料7 国際的な動向について
- 資料8 適合性評価の動向について
- 参考資料 事業戦略への上手な国際標準化活用のススメ(初版)

5 議事概要:

5.1 前回標準部会(書面審議)の結果報告について

事務局から、資料2に基づき第38回書面審議の結果が報告された。

5.2 「国際標準化戦略目標」を踏まえた国際標準化活動基盤強化アクションプランの見直しについて

事務局から、資料3に基づき、国際標準化戦略目標及び国際標準化活動基盤強化アクションプラン見直しについて説明があり、以下のような質疑応答があった。

(小野委員)「標準担当者の適切な評価とバックアップ」について、これは企業だけでなく研究所の問題でもある。研究プログラムの中に標準化を、どうビルトインしていくか我々も模索している段階である。産総研においては、標準化を第一の目標として研究センターを設立するといった事例もあり、確実な進歩はあるが、標準化に対する基本的な認識というところでは、やや欠けているところもある。

(塩沢委員)内閣官房、経団連、経済産業省と意見交換をしながら、私共国際標準化支援センターの考えをまとめてきた。概念的には2つのことを基本コンセプトとして頭に置いている。第一に、国際標準化活動に効果的に日本産業界の方々が参加できるようにするための専門的な情報、ノウハウ、スキル、そのために必要な基盤的なサービスを提供する役割を果たしていくことが大事。第二に、より日本の産業界の方々が効果的に国際標準化活動を行えるようにするために、情報の一元的収集、分析、提供ができるよう目指していく。

(吹譯委員)国際標準化戦略目標の今後の取組の方針に、企業経営者の意識改革とあるが、電子業界では国際標準化の重要性については認識しているが、どちらかというと人的な面でも資金的な面でも、デファクトを重視し

ている。デジュールについては、重要だと理解してもらえても、なかなかそれに対する支援を会社がやるというような形にもっていきにくい。企業にとっては競争の源泉となる標準に対して取り組まなければならないが、相当先に予想される問題(デジュール)は後回しになる。デジュールとは公共財的な意味合いと言うことを、国から呼びかけて企業の努力を引き出すことをやっていく必要がある。

重点分野を定めての取組は良いことだとは思いますが、上手くコンセンサスをつくって、研究者や実際に将来使っていく人たちの声が真剣味をもったものとしてまとめられるか、それを経営者に伝えていけるかが問題。

標準の専門家をキープして、特に海外に人を送り出す際にはコストがかかる。そういった面からの支援策をお願いしたい。

最近、中国が独自標準を出してきており、私共も注意を要する状況になっている。日中間の標準関係者の顔合わせ、意見交換をし、相手をよく知り、どういう状況に自分たちがあるかを意見交換していこうと考えている。是非、国からも同席して頂き、国の状況を御説明頂くといった形での協力をお願いしたい。

(宮沢委員) 研究開発プロジェクトの成果活用として標準化を推進しているが、研究開発の成果全てを自動的に標準化するのがいいとは限らないわけで、標準化する時期や、デファクト、デジュールどちらが適切なのかとか、研究開発だけの立場ではなくて、事業の展開ということまで踏まえた視野が必要だと思っている。今後、事例研究、技術経営的なガイドラインや知恵のようなものをみんなで積み上げていくと標準化は進みやすくなると思う。

(若井委員代理林) 今後の取組の方針には無かったが、消費者をもっと規格作成に関与させて頂きたい。今の状況は、先進技術は欧米だが、将来を考えるとアジア太平洋、日中韓の連携に重点を移した方が良いのではないか。

(部会長) どういう分野について日中韓の連携を重視すればよいか、何かお気づきの点はないか。

(飯塚委員) 例えば、ソフトウェア(社会システムや支援システム等さまざま)分野で中国の力が必要。かなり大きな経済圏があり、欧米に対抗するための道具として標準が使える。

(部会長) 幹事国の倍増という目標については、人の座っている座布団をどう取るかということに踏み込まない限り、達成が難しい。日中韓の連携の話は、新しい座布団を用意していく話題だと思うが、一方、その浮動カを使ってアジアが国際標準の中で重要な地位を占めるという戦略の一つの軸になり得る。

(佐野委員) 国際標準化戦略目標について、数ではなく中身で勝負して欲しい。

企業の方、行政が頑張っても国民がついていけるのかということも、もう一度考えてもらいたい。国際的に進んでいくのは良いが、それと同時に消費者に対しても説明してもらい、最終的に経済界の方だけが国外で活躍しているといった状況にならないような努力もして頂きたい。

(飯塚委員) 数値目標がしっかりしていれば質も伴ってくる。

今後の取組方針の2番について、提案をする際のメカニズムが必要で、どのようなメカニズムを国としてもっていなければならないか、現在どこがどう弱いか、また、どこを強化したら良いかという具体的なプランをもっていなければならない。

取組方針の3番について、どのようなクラスの人達をどのような風を集めて、どんなトレーニング、キャリアパスをつくっていくか、具体的なプランをもっていなければならない。

(事務局) 御意見、御質問にお答えします。

- ・大学や学会における研究者等の適切な評価や支援が重要であるということは御指摘のとおりであり、具体的なアクションを取っていきたいと考えている。

- ・日本規格協会できりまとめて頂いた国際標準化に関する支援活動の強化策等と連携をとって、JISCのアクションプランをつくっていききたい。

- ・フォーラムやコンソーシアムも重要だが、デジュールは最終的には各国の国家規格に整合されるので、ビジネスを国際展開する際には、デジュールが一番頼りになるということ、デジュールに持っていくためのルートとして、フォーラムやコンソーシアム規格をなるべく早くつくり、最終的にはデジュールにするべきであるということも、明確にPRしていこうと思っている。

- ・研究者としての重点分野と事業戦略としての重点分野は、必ずしも一致しない場合がある。これから各分野のアクションプランをつくっていく中で、重点分野に対応した重点テーマについても掘り出すが、事業戦略から見て重要な分野を業界、企業の方からも御提案頂き、それを各論のアクションプランに盛り込んでいきたい。

- ・資金面の支援については、どんな支援を重点的に展開していくかについては、アクションプランに盛り込んでいきたいと考えている。

- ・中国は、国が戦略的に独自標準を引っ張っているというような状況があり、必要な場合には中国との情報交換がスムーズにいくように支援・同席していきたい。

- ・我が国の国際標準に関する取組事例については、「事業戦略と標準化シンポジウム」において「事業戦略への上手な国際標準化活用のススメ」を公表し、こういったものを通じて事業戦略、経営戦略に対して関係者の

方々に国際標準化を上手に使うって頂きたいと考えている。

- ・日中韓の連携強化については高齢者・障害者配慮のアクセシブルデザインなどで日中韓で共同でISOに提案したという実績もあり、飯塚委員ご指摘のソフト面での協力も可能性としてはあるのではないかと考えている。
- ・消費者の参画については、セミナーを開いているが、なかなか座学だけでは上手くいかないというご指摘もあり、規格作成への参画をどのように盛り上げていくかについてアドバイスを頂ければありがたい。

(塩沢委員)アメリカでは、規格基準をつくる技術者が誇りを持っており、規格基準づくりは大事だという信念をもって標準化活動が行われている。アメリカの技術者グループや団体は、ANSIの教育訓練活動にお金を出してでも参加している。

(部会長)標準をつくることに、技術者が誇りをもっているのは、日本でも同じ。標準を議論できるような人達が、企業や国立研究所の中で高く評価されていないという事実は感じる。

(宮入委員)企業経営者の意識改革が大事。

5.3 平成18年度工業標準化状況報告及び平成19年度工業標準化業務計画案の概要について／平成18年度工業標準化審議計画(追加)について／平成19年度標準化のための調査研究テーマ案(新規)について

事務局から、資料4-1～資料6-2に基づき説明し、次の質疑応答の後それぞれ了承された。

(富田委員)新JIS制度になり、JISマークが付けられるような商品が増えたが、どの程度活用されていくのか、情報を頂きたい。

(佐野委員)新JIS制度でJISマークがもっと見えてくると思ったが、そうでもない。一般の消費者にも、規格は役に立っているということを認識してもらうように、啓発をお願いしたい。

資料6-1の中の、「包装・容器のアクセシブルデザインに関する標準化」については、「環境を配慮した」という言葉を加えて頂きたい。

(飯塚委員)資料4について、標準化の具体的な成果として、社会構造の変化、競争力の観点から、どういう効果があったのかが分からない。

(事務局)次回部会でご審議頂く19年度業務計画を策定する際に留意したい。

5.4 基準認証を巡る最近の動向について

事務局から、資料7及び資料8に基づき報告した後、以下の質疑応答が行われた。

(富田委員)新 JIS マーク制度になり、JIS がどう扱われるかという観点で、制度のあり方や方向を見ていくべき。

(佐野委員)消費者にとっては JIS マークがある方が良いが、JIS マークが増えないのは何故か。

(事務局)JIS マーク事態に魅力がない、または JIS マークを付けても商品の差別化に結びつかないといったところが考えられるので、どうすれば魅力的なものになるかという調査をやっていくと同時に、JIS マーク制度専門委員会で JIS マーク制度をどう魅力的にしていくかという検討も始めたい。

・次回の開催について

次回標準部会は、5月11日の午後に開催することとされた。